

Title	埃及紀行(天沼俊一著, 岩波書店發行)
Sub Title	
Author	間崎, 万里(Masaki, Masato)
Publisher	三田史学会
Publication year	1929
Jtitle	史学 Vol.8, No.1 (1929. 3) ,p.153- 153
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19290300-0153">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19290300-0153</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

書評

埃及紀行(天沼俊一著 岩波書店發行)

エチオピアはカイロの附近を瞥見したるに止まり、その他を見るべくしてその機會を取り遁した僕にとつて、本書は大なる興味を以て讀まれた。エチオピアはアツヤでなく、ヨーロッパでもない。しかも歐亞の古代史をとくものは、何れもその文化の源をこの地に溯らせて来る。その歴史は古く、その歴史の研究は新しい。『新しい過去』(The New Past etc., by J. H. Breasted and others, 1925, Oxford)と言はるゝのも無理でない。随つてこの地に興味は惹かれ乍らも、この地をよく見てこの地のことをよく記した日本人は未だない。好矣あつたにしてもそれはあるといふだけで價値はないのであらう。

天沼氏著はす所の埃及紀行は、著者自からも言はれてゐる如く『幾多の古蹟を割愛し、僅かに四五ヶ所を大急ぎで一通り見物し、明日庵まで歸つたのである』(はしがき一頁)けれども、それだけの紀行として見ても優に立派な恐らく旅行者の通癖である偽の記事を見ない頗る真面目の著述である。近時の進歩せる埃及學から見て、歴史的には勿論物足りない記述であらうけれども、著者序言にいふ如き『記事は頗る非學術的だ』とどこをどう歩いて

どんな事に出會つたかを記したに止るから、毒にも薬にもならぬ。先づ汽車中で新聞紙を讀んで了つたあとか、又は床の中で寐ながら讀む程度のもの』ではない。地中海航路をとつて歐洲に旅行する邦人は必ず讀むべきである。讀者は本書によつて、エチオピアの古代文化の遺跡遺物について得る所が少なくないであらうし、また滯歐中、各地博物館に於けるそれ等一部の陳列品を見たる時必ずや興味を加ふるものがあらう。

本書の中に見らるゝ寫眞の多くは、著者自からの撮影によられるもの、複製であつて、記事にも増して異彩を放つてゐる。平素余の渴望せるはかくの如き著述である。この點に於て余は謝辭の限を盡すを厭はぬものである。

たゞ固有名詞を及ぶ限り當字を以て表現せんことに苦心せられアラビヤ語を暴夜語、アスアンを明日庵、その他拜禮島、張玲、象島などせられたことは、本書の如きに於て或は言議すべきでないかも知れないが、それは兎に角、時勢に逆行するもので、僕は甚しく不快を催した。本邦の舶來建築語彙の譯語が特に六かしいのは、本書の著者の如き人々の仕業であるか、それとも本書の著者がそれに感化せられたのであるかも知れない。今後の新造語に對しては著者の一考を煩はしたい。(間崎万里)

世界的日本主義(著者 卯之助 著 ダイヤモンド社發行)

若宮叢書の第一篇。菊列三十六頁。本書は先づ『世界が日本に來襲して、日本が世界に乗り出した』ことは、人類史に無比の大案